とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	港区　港南３丁目　５－１０
園名	まほうの保育園　港南芝浦

１　活動のテーマ

＜テーマ＞

ひかり

＜テーマの設定理由＞

日々の保育の中で、子どもたちが窓越しの太陽の光に手を伸ばしたり、影を追いかけたりする姿が見られた。 その様子から、光に対する興味や不思議さを感じていることがわかり、「もっと見たい」「触ってみたい」という気持ちが育っているようだった。このような日常の姿から、「光」は子どもたちの探究心や表現力を育てるテーマとしてふさわしいと考えた。

２　活動スケジュール

全５回実地予定　（12/26・1/16・1/28・2/20・3/13）

・１回目：『”ひかり”を見て、感じる。』

水槽に水を入れ、窓越しに光を当てて、水面の反射や揺らぎを観察する

・２回目：『様々な”ひかり”を体験しよう。』

暗い部屋で、懐中電灯やデスクトップライトなど人工的なひかりを見つけ光を感じる

・３回目：『”ひかり”を使って遊んでみよう』

トレース台や懐中電灯、デスクトップライト、プロじゃクターなどを使い、光で実際に遊んでみる。

・４回目：『”ひかり”を使って遊んでみよう』

３回目で使用したライトを様々なものに当て、影や光の屈折、反射などを楽しみながら光に触れる。

・５回目：『”ひかり”を使って遊んでみよう』

今までの活動をもとに自由に遊び、展開していく

３　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

●準備した素材・道具

水槽、机、カラーセロハン、ブルーシート、不織布（黒）、ライトボード、ライトボード観察用の台、プロジェクター、懐中電灯、デスクトップライト、センサリーボトル、カップ、iPhone など、光の反射・屈折・影などを多角的に体験できる素材や道具を用意した。

●環境の設定

子どもたちが光の不思議さや美しさをじっくり感じ取れるよう、活動に応じて保育室の照明を調整し、暗い空間をつくるなどの工夫を行った。観察や遊びがしやすいよう、準備物は子どもの目線に合わせて配置し、実際に手に取って試せるようにした。また、コード類でつまずかないように配慮し、触れても安全な素材を選定。ライトボードや懐中電灯のコーナーを設け、子どもたちが自らの興味や発見をもとに自由に遊びを展開できるよう、開放的で安心できる空間づくりを心がけた。

４　探究活動の実践

＜活動の内容＞

「ひかりってなんだろう？」という問いから始まり、子どもたちは身の回りの光に注目し、懐中電灯やライトボード、太陽の光などを使って光を探し始めた。セロハンや水、手足に光を当てることで、色や素材によって見え方が変わることに気づき、色の重なりにも興味を広げていった。

活動を重ねる中で、「光っているものって何がある？」という問いかけに対し、「宝石」「太陽」など自分なりのイメージを言葉にする姿も見られた。保育室を暗くし、光の変化をより感じられる環境を整えることで、光の通り方や反射の違いを楽しんでいた。

後半は、スタンドライトや懐中電灯、カラーセロハンを使った「光と影あそび」や、クリア積み木を使った光の探究へと発展。子どもたちは自由にコーナーを行き来しながら、光を通したり反射させたりして、素材の違いや光の面白さに夢中になって遊び込んでいた。

そして、光を通して色の変化を感じたり、色の重なりを試したりする中で、子どもたちの興味は自然と「色そのもの」へと広がっていった。光あそびで培った気づきが、絵の具や色紙を使った色あそびへとつながり、光と色の関係を自分なりに確かめようとする姿も見られた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

活動を通して、子どもたちは「ひかりってなんだろう？」という問いに向き合いながら、身の回りの光を探し、さまざまな素材や環境に光を当てて観察することを楽しんでいた。「水に光を当ててみたい」「お部屋を暗くしてみよう」など、子どもたちのつぶやきや発想をもとに活動を展開し、光の当て方や見る角度による変化を発見していた。
セロハンや画用紙、水などを使った観察では、「赤は見えるけど黒は見えない」「青は少しだけ光が通る」など、色や素材による光の通り方の違いに気づき、友だちと見せ合いながら発見を共有する姿が見られた。また、光を当てたときにできる影にも関心が高まり、「動かすと影も動く！」と影の形や動きに夢中になる様子もあった。
その後の活動では、光と影を使った遊びが広がり、懐中電灯やカラーセロハンを使って色の重なりや影の変化を楽しんだ。「赤と青を重ねたら紫になった！」「おばけみたい！」と歓声をあげながら、即興の影絵劇を始めるなど、想像力豊かに遊びを展開していた。
活動の後半には、クリア積み木やセンサリーボトルなど新たな素材も加わり、子どもたちは光を通してできるカラフルな影や反射の美しさに目を輝かせていた。「赤になった！」「こっちは青だよ！」と友だちと発見を共有し合いながら、遊びを深めていった。
保育者も子どもたちと一緒に活動に加わり、「どこに光を当ててみようか？」「色が混ざったらどうなるかな？」と声をかけながら、子どもたちの気づきや探究心を引き出す関わりを大切にしていた。そして、光を通して色の変化や色の重なりを体験する中で、子どもたちの興味は自然と「色そのもの」へと広がっていった。光あそびで得た気づきが、絵の具や色紙、クレヨンなどを使った色あそびへとつながり、光と色の関係を自分なりに確かめようとする姿も見られるようになっていった。

５　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

「ひかりとは？」という問いかけに対して、子どもたちからは「ぴかぴかしているもの」「電気」などの答えが返ってきた。普段何気なく使っている言葉でも、いざ言葉にしようとすると、その意味をどう表現すればよいのか迷う様子が見られた。改めて、“ひかり”という言葉が抽象的であること、そして子どもたち一人ひとりが異なるイメージや経験をもとに表現していることに気づかされた。

子どもたちのつぶやきや発見に耳を傾けながら、実際に“ひかり”を見たり、触れたり、感じたりできるような環境を整えることで、より深い学びや気づきにつながると感じた。今後も日々の保育の中で子どもたちの言葉を丁寧に拾い上げながら、次の活動へとつなげていきたい。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都品川区東大井 4-7-9　1 階
園名	まほうの保育園東大井

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

ひかりとのかかわり ～光と影の不思議を探究する～

＜テーマの設定理由＞

日頃の製作活動でカラーセロファンを使用した際、それを透かして色の変化を楽しむ姿が見られました 。子どもたちの「もっと見たい」「不思議だな」という好奇心を広げるため、園の特色である自由な発想を大切にする環境設定を活かし、プロジェクターや様々な素材を用いた「光と影」の探究活動をテーマに設定しました 。

2　活動スケジュール

12 月上旬： 1 歳児クラスでの実践（光に触れる、色の変化を楽しむ）
12 月中旬： 2 歳児クラスでの実践（影の形への興味、素材による映り方の違いを発見する）

3　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

視覚的環境： 室内を暗くし、プロジェクターで壁面に光を投影。暗がりを怖がる子に配慮し、安心感を与えるプラネタリウムライトも併設しました 。
探索素材： 光を透過するカラーセロファン、オーガンジー、マグネット玩具に加え、2 歳児向けには緩衝材（プチプチ）や透明ビニールなどの廃材を多めに用意し、影の質感の違いを楽しめるようにしました 。

4　探究活動の実践

＜活動の内容＞

1 歳児の姿： 最初は非日常的な空間に緊張していましたが、すぐに光や投影された映像を追いかけ始めました 。スカーフを光にかざして自分の体に色がつくことを喜んだり、セロファン越しに世界の色が変わる様子をじっと見つめたりする姿が印象的でした 。2 歳児の姿： 先に活動していた 1 歳児の様子を見ていたため、開始前から期待感に溢れていました 。

2 歳児は光そのものより「影の形」に強い興味を示し、動く影を捕まえようとする「もぐらたたき」のような遊びに発展しました 。また、複数のセロファンを重ねて新しい色が生まれる発見をしたり、廃材の凹凸が複雑な影を作ることに気づいて繰り返し試したりする探究心が見られました 。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

5　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

発達による探究の違い： 1 歳児は「光による色の変化」という感覚的な楽しみが中心でしたが、2 歳児は「なぜこんな形になるのか」という対象物の変化や物理的な現象に興味が移行していることが分かりました 。

今後の課題： シルエットクイズでは、壁の影よりも保育者の手元に注目が集まってしまったため、投影距離や提示方法を工夫することで、より視覚的な不思議さを強調できると感じました 。活動終了時に「明日もやりたい！」という声が多く上がったため、日常保育の中でも光を取り入れたコーナー遊びを継続していきたいと考えています 。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都品川区東大井 4-7-9　1 階
園名	まほうの保育園東大井

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

ひかりとのかかわり ～ひかりとかげの表現遊び～

＜テーマの設定理由＞

12 月に室内でプロジェクターを用いた光遊びを経験したことで、子どもたちの間で「光を通すと色が変わる」「影を動かせる」という発見への意欲が高まっていました 。1 月は、冬の澄んだ自然光が差し込む窓辺での遊びや、異なる素材を組み合わせることで生まれる「質の違う影」への興味を深めることを目的として、このテーマを設定しました 。

2　活動スケジュール

1 月中旬： 1 歳児クラス：光を通す素材（セロファン、オーガンジー）を用いた「色の世界」の探索
1 月下旬： 2 歳児クラス：廃材や身近な物を用いた「影の形・質感」の実験と、色の重なりの発見

3　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

準備した物： プロジェクター、カラーセロファン、オーガンジー、マグネット玩具に加え、緩衝材（プチプチ）、透明容器、カラーポリ袋、鏡 。
環境デザイン： 室内を暗くした空間（人工光）だけでなく、日中の窓辺（自然光）に色セロファンを提示し、光の強さによる色の見え方の違いを感じられる環境を整えました 。また、12 月の経験から暗がりを怖がる子への配慮（プラネタリウムライトの設置）も継続しました 。

4　探究活動の実践

＜活動の内容＞

1 歳児の姿： スカーフやセロファンを自分の顔に近づけ、視界全体の色が変わる現象を繰り返し楽しんでいました 。12 月の時よりも自発的に「これを通すとどう見えるかな？」と素材を選び、光にかざして自分の手足に映る色を不思議そうに見つめる姿が見られました。
2 歳児の様子： 12 月は「影を追う」遊びが中心でしたが、1 月は「どうすればこの影ができるか」という因果関係への関心が強まりました 。複数のセロファンを重ねて「緑になった！」と色の変化を報告し合ったり、緩衝材の凹凸が投影される様子を見て「キラキラしてる」と質感の違いに気づいたりする姿がありました 。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

5　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

深化する探究心： 12 月の「導入」を経て、1 月は子どもたちが素材の特性を理解し、自ら遊びを工夫する姿が見られました 。特に 2 歳児において、意図的に色を重ねる、影の形を作るなどの「実験的」な行動が増えたことは大きな成長です 。
環境設定の有効性： 12 月より素材（廃材やビニール類）を充実させたことで、遊びが単調にならず、子どもの「知りたい」という気持ちを持続させることができました 。
今後の課題： 子どもたちの興味が「色の合成」や「反射」へと広がっているため、今後は鏡や水など、より光を反射・屈折させる素材を取り入れ、科学的な視点を育む活動へ繋げていきたいと考えています。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	東京都品川区東大井 4-7-9　1 階
園名	まほうの保育園東大井

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

ひかりとのかかわり ～自分で作り・映し出す、ひかりのあそびば～

＜テーマの設定理由＞

12 月・1 月の活動を通じ、子どもたちは光が色を変えたり、影が形を作ったりする現象を十分に楽しんできました。3 月はその集大成として、受け身で光を見るのではなく、「自ら懐中電灯を持ち、光を操る」「素材に描いた絵や模様を投影する」といった、より意図的・創造的な探究を促すためにこのテーマを設定しました。

2　活動スケジュール

3 月上旬： 素材（紙コップ・セロファン）を用いた「自分だけの投影機」作り
3 月中旬： 1 歳児・2 歳児合同：懐中電灯を使った光の探索と、壁面への投影遊び

3　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

準備した物： 懐中電灯、紙コップ、サインペン、カラーセロファン、遮光カーテン。
環境デザイン： 室内を完全に暗くできる空間を用意しました。以前の活動で暗がりを怖がっていた子も、今回は「自分で光（懐中電灯）を持てる」ことで安心感と主体性を持って参加できるよう配慮しました。壁一面を大きなスクリーンに見立て、自由に光を当てられる広さを確保しました。

４　探究活動の実践

＜活動の内容＞

1 歳児の姿：プロジェクターの固定された光ではなく、自分の手に持った懐中電灯から光が出ることに驚きと喜びを感じていました。ライトを壁にピタリとくっつけると小さな円になり、離すと大きく広がる様子に気づき、何度も腕を前後に動かして光の大きさを変える「実験」を繰り返していました。また、床に置いたカラーセロファンに自ら光を当て、自分の足元が赤や青に染まるのを見つけると、まるでお風呂に入っているかのようにその光の中に座り込み、全身で色の世界に浸る姿が印象的でした。

2 歳児の姿：これまでの活動で得た「透ける」「重なる」という知識をフルに活用していました。紙コップの底に描いた自分の絵が壁に大きく映し出されると、「おばけだぞー！」「私の描いたお花、光った！」と友達と見せ合い、光を通した表現を存分に楽しんでいました。さらに、懐中電灯の前に手をかざして「影絵」を作ろうとしたり、友達のライトと自分のライトをわざと重ねて「ここだけ色が違うよ！」「もっと濃くなった！」と、色の混ざり合い（加法混色）への初期的な気づきを言葉にして伝え合うなど、一段深い探究心と協同的な学びの姿が見られました。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

５　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

主体性の深化： プロジェクターなどの据え置きの光ではなく、手持ちのライトを使用したことで、子どもたちの「自分の意思で光を動かしている」という万能感やワクワク感がより強く引き出されました。

継続の効果： 12 月からの継続により、セロファンを見れば「あ、色が変わるやつだ！」と即座に理解し、迷わず遊び始める姿に、これまでの探究の積み重ねを感じました。

今後の展望： 3 ヶ月間の活動を経て、光への興味は「描く・作る」という表現活動へと繋がりました。進級後も、この好奇心を大切にしながら、季節ごとの自然光の変化や影の観察など、日常の中の小さな不思議を拾い上げていきたいと考えています。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	大田区東雪谷 2-21-12-1F
園名	まほうの保育園東雪谷園

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

『音』(0 歳児)

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

ふれあい遊びの時間にガラガラの玩具を使って音を出したり、ビーズ入りの手づくりマラカスを振ったり壁に叩いたりして音やリズムを楽しむ姿が見られた。他にも、戸外に行った際に子どもがどんぐりや石を拾って地面に落とし、その時に出る音を楽しんでいる様子も見られた。その様子から、音のでる仕組みに気づいたり、様々な音に興味や関心を広げたりしていけたらと思い『音』（音遊び）をテーマに設定した。

2　活動スケジュール

11 月　**■マラカス作り、マラカス遊び。**

・マラカスを振ってリズム遊びを楽しむ。

・自分たちでマラカスを作る。

(戸外活動にて、マラカスの中身に使用するどんぐりや小石拾いを行う。)

12 月　**■音の違いを楽しむ。**

・太鼓、タンバリンを叩いてみる。(手、素材違いのスティックなど)

・風船太鼓を叩いたり、引っ張ったりする。

1 月　**■色々な楽器を叩いてみる。**

・感触を楽しみながら音をだしてみる。(トライアングル、ギロなど)

・オーシャンドラム等を使って自分なりの音の出し方を楽しむ。

2 月　**■音階に気づき興味を持つ。**

・ミュージックパッド、ハンドベル、鉄琴、木琴等。

3 月　**■製作をしながら音遊びを楽しむ。**

・鈴を入れた容器をスタンプに見立てて押し、音を楽しむ。

３　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

・R1 の容器　・どんぐり　・小石　・砂　・風船太鼓　・オーシャンドラム
・小太鼓（ジャンベ）　・大太鼓　・トライアングル　・ギロ　・ミュージックパット　・鉄琴　・木琴　・ハンドベル　・折り紙　・鈴スタンプ　・絵本（たいこ）

“音の発見”や“音の違い”に子どもが自ら気付けるように、例えばマラカス作りでは、日ごろからどんぐりの入ったマラカスで遊んでいたが、空の容器を渡してみることで、振っても音が出ないことに気づき「なぜだろう？」を感じられるようにした。中に入れるどんぐり等も、子ども達がより興味を持てるよう、戸外遊びにて自分達で集めるようにした。太鼓では床に置いた時と持ち上げた時とではどのような音の違いがあるか等を聴き比べられたり出来るような環境を設定していった。

子ども達が主体的に音に親しみ遊べるよう、用意したものは自由に手に取り音を鳴らして楽しめる環境を整えた。また、ミュージックパッドのように、手だけではなく全身を動かしながら音を出せるような遊具も用意した。音だけでなく音階にも気づけるような楽器も用意した。また、さまざまな音を楽しめるよう、製作を行う時も折り紙をちぎったり、鈴スタンプを用意したりして、日ごろの遊びの中で“音”も一緒に楽しめるような活動を意識するようにした。

導入や体験したことを振り返ることができるよう関連する絵本も使用した。

４　探究活動の実践

＜活動の内容＞

■楽器作りを通して、音が鳴る仕組みに興味を持つ。

・手作りマラカス…あえて空の容器を渡してみる。その後、ドングリや小石を使って自分たちでマラカス作りを行い、空き容器にドングリや小石を入れると音が鳴ること、入れるものによって音の鳴り方が違うことに気づき興味を持つ。リズム遊びの際にマラカスを振って音遊びを楽しむ。

■タンバリンや風船太鼓など、さまざまな音を楽しむ。

・タンバリンを叩いてリズム遊びを楽しむ。
・風船太鼓を叩いたり引っ張ったりして音を出すことを楽しむ。

■オーシャンドラム・小太鼓・大太鼓を使用し、たたく場所、物、素材などによる音の違いに興味を持つ。叩いた時の振動を感じる。

・太鼓を床に置いて叩いた時、持ち上げて叩いた時の音や振動の違いを感じる。
・短く切ったホースやスティックを使い太鼓を叩いてみる。手で叩いた時との音の変化を感じる。
・オーシャンドラムを使って波の音を感じる。

■ミュージックパッドを使用し、音のなる仕組みや音階に興味を持つ。

・自分で叩いたり踏んだりした時に音がなるという仕組みを楽しみながら、音階を知る。

■鈴スタンプを使い、製作をする。

・画用紙にスタンプをするという活動をしながら鈴の音色を楽しむ。
また、製作では鈴を入れたスタンプを使い“押す”という動作と共に音を感じる体験を取り入れたことで表現活動とこれまでのすくわく活動に連動性をもたせた。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

どんぐりマラカスの活動では、何も入っていない容器を渡すと振っても音が出ないことに気付き“あれ？”と不思議そうな表情を見せたり容器の底を確認したりする姿が見られた。その後に「今度はみんなで拾ったどんぐりを入れたらどんな音が鳴るかな？」と声をかけた。すると、ワクワクしたような表情でどんぐりを入れる姿がみられた。どんぐりを入れて“コロン”と音が鳴るとハッとした表情を見せてから保育者の顔を見て笑顔むけ、『物を入れたら音が鳴る』ということに気付き、子どもたちが音の面白さを感じた瞬間であったことが分かった。

太鼓遊びでは、床に置いて叩いた時と手に持って叩いた時では音の響き方が異なることに気付き、「あれ？」と言葉にしたり、叩き方や持ち方を変えながら音の違いを確かめたりする姿が見られた。叩いた際に伝わる振動を手で感じ取ったり、耳を近づけて聞こうとしたりするなど音だけでなく振動や響きにも関心を向ける様子が見られた。スティックを使用した際は、木、プラスチック等、素材によっても音や叩いた時の感覚が違うことにも気づいたようで、確かめるように叩く姿も見られた。

コップと風船で作った太鼓を出すと、最初は底や側面を見て観察していたが保育者が「ポンポンしたらどんな音がするかな？」と声をかけると手で叩いたりホースで突いたりする姿が見られた。触っていく内に、風船の部分が伸びることに気付いた子どもがいた。引っ張ってから手を離すと“ポン”という音がして少し驚いた表情を見せた後笑顔へと変わった。その様子を見ていた他児も連鎖するように引っ張って音を出す遊びを楽しんでいた。

ミュージックパッドでは踏むことで音が鳴る仕組みに気付き、繰り返し踏んで音の変化を楽しんだり、体を動かしながら音との関わりを楽しんだりする姿が見られた。同じ音を気に入って踏み続ける子どももいれば、様々な音程を楽しみながらパッドを踏む子どももいた。さまざまな楽器による音色の違いも楽しんでいる様子であった。

製作活動の鈴入りスタンプでは、押すたびになる音を面白がりながら繰り返し押して、音の鳴る仕組みや音の存在に気付く姿が見られた。このように、子どもたちは遊びや活動の中で主体的に音を試し、その違いや特徴を感じ取りながら音の探究を楽しんでいた。

５　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

今回の活動を通して、子どもたちは楽器を鳴らすこと自体を楽しむだけでなく、叩き方や置き方・触れ方などを自分なりに試しながら音の違いを確認していることに気付いた。特に太鼓では、床に置いた時と手に持った時で音の響き方が異なることに気付き叩き比べる姿が見られた。自ら音の変化を探ることで、子どもたちは遊びの中で自然に音の特徴を感じ取り、主体的に試行錯誤していることに改めて気付かされた。

また、叩いた際に伝わる振動を手で感じ‘聞く’だけではなく体全体で音を感じ取っていることが分かった。音遊びは聴覚だけではなく、触覚や身体感覚とも結びついている経験であることを、保育者自身も改めて実感する機会となった。

ミュージックパッドでは踏むことで音が鳴ることを知り、体の動きと音が結びつくことで子どもたちの興味や遊びがより広がることにも気づいた。鈴入りスタンプでも、スタンプを押すたびに鳴る音を面白がり、繰り返し楽しむ姿から表現活動の中に音の要素を取り入れることで子どもたちの興味や関心・探求心を引き出すことに繋がると感じた。

子どもたちは環境の中にある様々な音に興味を持ち、自ら音を試したり確かめたりしながら遊びを深めていく姿が見られた。保育者としても、子どもの気付きや試す姿を大切にしながら、多様な素材や環境を意識することで子どもの探究心や発見がより広がることを感じた。今後も楽器を始めとし、身近な素材や自然物などにも目を向け、子どもたちが主体的に‘音’と出会う環境づくりを意識していきたい。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	大田区東雪谷 2-21-12-1F
園名	まほうの保育園東雪谷

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

光と影（1 歳児クラス）

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）
誕生会の出し物で影絵シアターを観たことをきっかけに影に意識が向くようになった。廊下のすりガラスに映ったシルエットに気づき「何かいるよ」という声や、戸外活動では地面に映った自分の影を見て「これなーに？」という声も聞かれるようになった為、光と影について探究を深めてみようと思いこのテーマを選んだ。

2　活動スケジュール

11 月　■室内、戸外で影の存在を知り楽しむ。
・影絵シアター、ライトを使用してのシルエット遊び。
・戸外にて自分の影、しゃぼん玉や木などの影に気づき興味を持つ。

12 月　■透過光の不思議さ、美しさを感じる。
・ライトテーブルとセロファン、カラーブロック使用。
・光を通したカラーセロファンやカラーブロックの美しさを感じる。

1 月　■野菜のシルエットクイズを通して向きによる見え方の違いを楽しむ。
・シルエットのイラストを使用後、本物の野菜を使用し向きを変えてみる。

2 月　■スクリーンに自分の影や好きな物を映してみる。
・ライト、プロジェクター、セロファン、玩具等使用。
・ライトテーブルにセロファンや好きな物を乗せて楽しむ。

3 月　■プロジェクターを使用した影の遊びを楽しむ。
・光源に近づける（近づく）と？離れると？
・透明なものを映すと？

3　活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）

・影絵シアターセット（ライト、映すイラスト）　・スクリーン　・カラーセロファン
・ライトテーブル（大/小）　・プロジェクター　・カラーブロック　・アクリル積み木

影に興味を持つきっかけになった“影絵シアター”を再度繰り返し楽しみ、影への興味を広げ深められるようにした。

戸外活動にて地面に映る自分の影の存在に気がつき不思議そうにしたり、「これは何？」と声があがったりした際には「これは影って言うんだよ。」と名前を伝え、自身の影以外にも、しゃぼん玉や木の枝などを映し、より関心を持てるようにした。

室内では、自由遊びの時間に興味を持った子から少人数で落ち着いて楽しめるよう、スペースを区切り、順番に取り組めるようにした。また、保育者が用意した特別な物だけでなく、子ども達の「これを映したらどうなるかな？」という探究心を引き出せるよう、自由遊びで使用している玩具も自由に手に取り映せるような環境の中で行った。

活動の最中は、子どもが影を作ろうとする自発的な姿を見守るようにし、影の大小、色の変化など、気付きや発見を楽しめるようにした。

次の段階として、自由遊びの中に一つの遊びのコーナーとして何日か継続的に場所を設け、好きな時に遊びに来られるようにした。

破損や危険のないよう、ライトテーブルに玩具を乗せる際は優しく置くこと、プロジェクターやライトは直接見ない事は約束としてあらかじめ伝えた。

4　探究活動の実践

＜活動の内容＞

■影の存在を知る

・誕生日会で使用した、影絵シアターのセットを使用し繰り返し遊ぶ。
（見せてもらう→裏舞台（仕組み）に興味を持つ→子ども自身の手を映して遊ぶ。）

■シルエットで遊ぶ

・子どもの手、身体、持っていた玩具、映してみたいと思った物の影を作り楽しむ。（ライト使用）その際、光を近づけたり、遠ざけたりして影の大きさを変えて変化の違いも楽しんだ。
・野菜のシルエットクイズでは本物の野菜を動かし、向きを変えたりして影の変化（見え方）の違いに気づけるようにした。

■光で遊ぶ

・卓上ライトを使って光を大きくしたり、小さくしたりして光の大きさの違いを楽しんだ。

■ライトテーブルで遊ぶ

・ライトテーブルを使い、セロファンやカラーブロックに後ろから光が当たることによる透過光の美しさ、面白さを味わった。またセロファンを各色用意し、重ねることでの色の変化にも興味を持てるようにした。好きな玩具も乗せてみて、光を通すもの、通さないものの違いに気づけるようにした。

■スクリーンで遊ぶ

・スクリーンに子どもたち自身が影を投影して実際に動かし、影の動きを楽しんだ。
・好きな物を手に持ち、形と動きと影の連動性の面白さを感じた。

■プロジェクターを使って遊ぶ

・小さなライトから、より光の強いプロジェクターを使い、壁やスクリーンに影を映し、身体を動かしたり、持っている物を動かしてみたりし、迫力のある大きな影で遊ぶことを楽しんだ。
アクリルブロックなどを通して投影したらどうなるのかなど、美しさや色の変化を楽しんだ。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

（活動にあったての内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

影絵シアターを繰り返し楽しむうちに、最初は影絵を見て楽しむだけであったが、しばらくすると、裏（仕組み）がどうなっているのか興味を持ち覗きこんできた。保育者がライトとスクリーンの間に手を入れ、手指で形を作っていたことがわかると、子ども達も同じように真似して手の影を映そうとしていた。

影の存在に興味を持ち始めた子ども達は、天気の良い日に散歩に出ると、地面に映る自分の影を見つめ“なにこれ？”と言った表情をする子、「これなに？」と聞く子もいた。「“影”だよ。」と伝えると、「影！影！」と嬉しそうに言いながら、足や手を動かすと影も動くことに、楽しそうな反応を見せていた。

室内でライトを使って影絵遊びをしていくうちに、自然と子どもたちから「(ライトで)あそびたい」という声が上がるようになった。光も影も大きさが変わることが特に気になったようで「おおきくなった」「ちいさくなった」、見えなくなると「なくなっちゃった」と声を出して活き活きと楽しむ姿が多く見られていた。また、影や光を追いかけて捕まえてみようとする姿も見られた。

ライトテーブルでは最初は光を通すもの（アクリルブロックやカラーセロファンなど）を用意した。カラーセロファンを顔に当て、いつもの保育室が色のついた世界に変わることを楽しむ子もいれば、すぐにライトテーブルに置き、次々色を変えて楽しむ子もいた。どちらも光を通した色の美しさを感じているようで集中して楽しむ姿が見られた。しばらくすると、カラーセロファンの色を重ね始めた。赤と青を重ね「パープルになった！」という声もあがり、色が重なる不思議さ、面白さを感じたようであった。その面白さから、何枚も重ね全ての色を重ねる子もいた。光を通さなくなり色も黒っぽく濁ってしまった様子を見て「色がなくなっちゃった！」と驚きの声をあげていた。

セロファンやアクリル積み木で楽しんでいる最中、子どもたち自身がこれは“どうなるのだろう”と思ったのか、普段遊んでいるおもちゃ（車や色水が入ったペットボトルなど）を乗せて遊び始めた。光を通しているものとそうでないものの違いを不思議そうに見る子どもたちの姿を見ることができた。

プロジェクターとスクリーンを使った際は準備の段階から期待感を持ち待つ姿があった。今まであまり大きな影を部屋の中で作ることができなかった為、大きな影ができた時には、初めは自分の影だと気づかない子もいた。自分が動くと影も動くことから自分の影と気づき、初めて見た大きな影に、子どもたちも驚きと一層の興味を持って楽しむ姿が見られた。光の前に立つことで自分の影が映っていることを知り、友だちと手を繋ぐとどうなるのかなど必要に応じて職員も声をかけながら、様々な動きを通して影の変化を楽しんでいた。光を発しているプロジェクターに興味を持つ姿も見られた。

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。
（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

5　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

子どもが興味を持ち始めたようだと感じたことで決めたテーマであったが、保育者が想像していた以上に、不思議さや面白さ、楽しさを感じたようで、子ども達自身から「今日も（光で）遊びたい！」という声も聞かれ、集中し、活き活きと楽しむ姿が見られた。

保育者があらかじめ用意した物以外にも、子ども達が“これを映したら、乗せたらどうなるだろう？”と、さまざまな物で試す姿に、保育者はそれができる環境を用意し最低限の適切な声掛けのみを行う事で、もともと子ども達自身が持っている“不思議に思う心”“探究心”をより育んでいけることを実感した。一歳児ということもあり、多くの活動を自由遊びの中に取り入れたことも良かったように思う。それにより、一層自由な発想を引き出すこともできた。また、最初は興味を示さなかった子も、友達の様子を見て「やってみたい！」という姿も見られた。

ライトテーブル上でセロファンを重ね、色の変化を楽しんでいた子は、重ねていくうちに色が黒っぽくなった様子を見て「色が無くなっちゃった！」と、驚きとショックが混ざったような声を発していた。「色が無くなる。」という大人には思いつかない表現に、子どもの純粋な気づきを感じ、はっとさせられた。これからも保育者が“教える”のではなく、こうした子どもの探究心や気付き、声を大切にできるような活動、関わりをしていきたい。

『光と影』をテーマにすることで、日常の中でも『影』に気づくことが増えたようだ。保育者の意識や取り組みにより、子どもの興味関心が広がっていくことも再認識できた。

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	大田区東雪谷 2-21-12-1F
園名	まほうの保育園東雪谷

1　活動のテーマ

＜テーマ＞

『砂・土』（２歳児クラス）

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

砂遊びが好きな子が多かった為、都心では触れる機会の少ない『土』にも触れてほしい、土ではどんな遊びが展開されるだろう？という思いがあった。身近な場所には土がないため、畑で野菜栽培・収穫を経験することで、土に関われるのではないか？と思い、畑を借り種まきから収穫まで体験できるプログラムに参加することとした。畑の隣に自由に土、泥遊びができるスペースも借り、普段遊んでいる『砂』との違いを感じながら土遊びを楽しむとともに、野菜が育つ場所としての土について、また、そこに住む虫にも触れ、『土』に関係する様々なことに興味関心を広げていけたらとテーマに選んだ。

2　活動スケジュール

9 月　■固い土に触れてみる。

・整備していない土遊びスペースの土に触れる。

・じゃが芋の種芋植え付け、大根種まき（3 種）

10 月　■ 泥遊び場の小石取り、畑体験。

・大根の間引き、間引いた葉を使って葉っぱスタンプ 10/14・収穫 10/28

11 月　■土・泥遊び、砂遊び、畑体験。

・泥遊び　土で山作り→山頂から水を流すと？11/11

・砂遊び　砂で山作り→山頂から水を流すと？

・畑で、収穫した野菜のお味噌汁をいただく。11/11

・大きな泥団子をつくってみよう！11/28

12 月　■育ったじゃが芋と大根の収穫 12/2　虫探し 12/2　泥遊び 12/5

1 月　■公園で砂遊び・畑で土遊び　　砂と土を虫眼鏡で見てみよう！

2 月　■降雪後の公園で泥遊び 2/9　虫眼鏡、顕微鏡体験。

・雪を見てみよう！ルーペ・顕微鏡で観察

3 月　■虫眼鏡、顕微鏡でいろいろなものを見てみよう。

・畑にでかけお礼を伝える。野菜収穫キャベツ・ブロッコリー3/2

・虫や花、興味のあるものを顕微鏡で見る

３　活動のために準備した素材や道具、環境

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
・畑　・土遊びスペース　・土、砂場遊びセット
・泥遊び場小石取り用…ふるい用ザル、黒シート、軍手、シャベル
借り物（バケツ、クワ・大きなシャベル・大きなザル）
・暑さ対策…予備の水ペットボトル 500ml（2 本）、紙コップ、氷、
暑さ指数が高めの時期は電車移動を行った。園長・保育者計 4 名
・手洗い用…ペーパータオル、ウェットティッシュ、ビニール袋
・収穫時…大きな袋
・畑に行く際の保護者の協力…汚れても良い靴・服装で 9:05 までの登園。
・土や砂を拡大して観察するルーペ・顕微鏡。

４　探究活動の実践

＜活動の内容＞

■土に触れる
・整備されていない固いままの土に触れる。ほぐす。
■小石取り
・泥遊びスペースの小石をふるいにかけ取り除く。
■ジャガイモの植え付けと大根の種まき
・土に穴を開ける、土手を作る。種芋や種を植え土をかぶせる。
■野菜の成長の観察
■大根の間引き
■土と砂の違いを知る
・土と砂でそれぞれの山を作り、頂上から水を流し、土と砂との違いを知る。
■泥遊び、泥団子作りを楽しむ
■野菜の収穫を体験する
■畑で虫探し
■ルーペを使って土と砂を見てみよう
・拡大して観察することを楽しむ。砂と土の違いを知る。
■降雪後の公園で雪遊び
・雪を見てみよう→ルーペ・顕微鏡
■花に興味を持ち、花を育てる
・植え替えの時に、ルーペで土や根っこを見てみよう。
■ルーペや顕微鏡でアリや花を見てみよう
・自分たちの拡大したい物を雪谷神社で探し、みんなで観賞会をする。
※ルーペでの砂、土の観察をきっかけに、子どもの興味関心が、「いろいろな物を見てみたい！」に変化したため、後半はその活動を増やした。

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）

■土に触れる

整備されていない固い土に触れてみると「冷たい～！」「かたい！」という声があがった。「砂遊びみたいに掘ってみようか」と声をかけると、掘ろうとするが固くて掘れず、保育者がシャベルで掘り起こしてみた。土の塊を楽しそうにほぐしており、砂と違う感触を味わうことができた。

■ジャガイモの植え付けと大根の種まき、大根の間引き

見慣れているジャガイモを種イモとしてそのまま植え付けることに「そのまま土に入れるの？」と不思議そうだったが、大切そうに土をかぶせていた。赤い大根の青い種に驚いていた。間引きでは、畑の方に「たくさん生えた葉を間引きしてあげると、野菜のお家を広げることになって、野菜が大きく育つんだよ」と教えられたが、「なんで抜いちゃうの？」と納得いかない様子の子もいた。

■土と砂の違いを知る、泥遊びを楽しむ

砂場、畑で子ども達が何人かで大きな山を作り、頂上から水を流してみた。

・土ではしっかりとした川ができてから池ができた。「水の通り道ができた！」と言ってすぐに、でき始めた池に手を突っ込んで、「つめたーい！」「ぽにょぽにょして気持ちいい～」と、泥の感触を存分に味わっていた。・砂では頂上ですぐに水が浸透し、川も途中で途絶え、池はできなかった。「あれ？砂の山だと水がなくなっちゃった！」「でも団子作れるようになったよ」

・大きな泥団子を作っては落とし、その音（ビシャ）や崩れる様子や泥跳ねを何度も繰り返し楽しんでいた。少量の水で土をこねると、粘土のようになった。両手でこすり合わせて蛇を作る子がいた。「ぼくもやりたい！どうやったの？」と興味を持つ子もいた。

■野菜の収穫を楽しむ

根が広がり、抜くのが大変な根菜類は大変そうであったが、腰をかがめ力いっぱい引き抜いていた。大きな声で「ぬけた！」と喜びを表す子もいれば、大きさに静かに驚いている子もいた。小さな種が土の中で大きく育った事を身をもって実感しているようであった。

■畑の中の虫さがし

初めて畑に行った時には幼虫らしき姿を発見し、土の中に入っていく様子を長い時間最後まで見届ける姿があった。10 月ころまではチョウやトンボ、ショウリョウバッタ、収穫時期には土の中にハサミムシや黒い芋虫等を見つけ嬉しそうであったが、寒くなると虫がいなくなったことに気づいた様子であった。

■ルーペを使って土や砂を見てみよう！

・砂と土を拡大して観察してみようと準備していたが、子どもたちはルーペそのものに興味を持ったようで、友達や自分の手等身近なものを興味深く見ていた。子どもの興味関心に寄り添い、絵本、図鑑などを自分たちが見たいものを用意すると「わぁ大きくなった！」「小さくなったよ！」とまるで研究者のようにしていろいろなものを見ていた。

■ルーペや顕微鏡を使っていろいろな物を見てみよう！

雪の結晶や蟻、花、散歩先で拾った大きく見てみたい物を観察すると「葉っぱに線がある！」「ちょっとこわい」（虫）などと声があがり、肉眼とは違う見え方に一層興味を持ったようであった。

活動の様子が分かる写真　2 枚以上を貼付してください。
（HP などで公開する可能性がありますので、公開可能なものを使用ください。）

5　振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

畑という開放的な環境も良かったのか、子ども達がとても活き活きと、時に黙々と、土の感触を楽しんだり、“こうしたらどうなるかな”と思い思いに試したりする様子があり、特に思い切り泥だらけになる経験はとても嬉しそうで、帰る時間になっても「もっと遊びたい！」という声もたくさん聞かれた。その様子に、汚れを気にせず自由に思い切り遊べることの大切さ、自然に触れることの大切さを感じた。

「土・砂」のテーマではあったが、畑での土体験としたことで、虫・野菜などにも興味関心の幅が広がり、特に野菜は自分達で種から育てたという経験から、持ち帰った野菜を「これ〇〇ちゃんの大根、どうぞ！」と家族にふるまう様子もあったり、苦手だった野菜を食べられるようになったりと、保育者が予想していた以上の子どもの変化を感じることができた。これからも子ども達の『実体験』を大切にしていきたい。

また、砂と土の違いを体感するだけでなく、目でも確認できたら面白いのではと用意した虫眼鏡や顕微鏡は、砂や土だけでなくそれを使っていろいろな物を見てみたいという気持ちが大きくなり、興味関心の対象が、虫眼鏡や雪や花などに派生していく様子も面白かった。土の探究を深めるという当初の予定通りではなかったが、子どもたちの声を拾っていくことの大切さ、面白さを感じた。